

勤儉尚武 勤儉尚武

vol. 20

真劍勝負

【日本の伝統文化】

[醸造文化]

最近、食の安全を震撼させる事件が相次いでおりますが、「食」は生命に関わる一大事であると同時に、食文化という言葉があるように、文化です。食生活の欧米化による健康への影響や、食料自給率の低さ、また、食の安全などが懸念されるなか、地域に根付いた伝統食が見直されています。

伊勢湾で水揚げされる魚介類や各地で収穫される米・麦・大豆などの農産物など、様々な素晴らしい食材、温暖な気候や河川がもたらす水源にも恵まれ、東海地方には、古くから豊かな醸造文化が発達し、味噌・醤油・みりん・酢など、日本人の食に欠かす事のできない調味料の製造元が数多く存在しました。

大豆からは味噌・醤油、米からはみりんや酢が製造されます。いずれも数百年の歴史を持ち、国内では勿論海外でも愛され、また健康ブームで日本食が高い評価を受けていますが、これらの調味料は日本食には欠かせません。それを支える伝統の技術が脈々と伝えられているのです。

[懐石料理]

次に、茶道の形式に則した食事の形式である懐石料理について述べたいと思います。

懐石料理の起源は文字通り「懐〔ふところ〕に石を抱く」事からきています。もともと修行中の禅僧の食事は、午前中に一度だけと決められていました。そのため当然夜になるとお腹が空き、体温が下がってきます。そこで温めた石を懐に抱いて飢えや寒さをしのいでいたのです。ここから懐石という言葉は、「わずかながら空腹を満たし、身体を温める質素な食べ物」を意味するようになりました。その後の安土桃山時代に茶道と禅宗が結びつき茶道が確立していきました。その中で茶道の創始者である千利休が禅料理の精神をさらに追求し茶道に取り入れ、狭い茶室でも簡単に食べることができる懐石料理を完成させました。起源は禅僧の修行だったものが、今日まで伝えられているのです。

[茶道]

茶道といえば、茶をいれて飲むだけでなく、生きていく目的や考え方、宗教、茶道具や茶室に置く美術品など、広い分野にまたがる総合芸術とされます。私は茶道に関しては全くの素人ですが、勤務先で国際教育を担当している関係で、オーストラリアからの留学生が日本に来た時「茶道」の体験をさせたことがあります。その時、茶道の先生に表千家・裏千家・武者小路千家のことを始めて教えていただいたくらい素人ですが、茶道の作法を注目していると、一挙手一投足無駄のない美しい動きで、人を敬い自然をいつくしむ心が随所に見られ、感動しました。床の間に飾られた雑草のように見える花について先生にお尋ねすると「今日は時間がなくて、お花を用意できなかったからここに来る途中道端で採ってきた『オトコエシ』というものです。オミナエシはよく聞くでしょう。女に対して男ですよ。」とおっしゃいました。そう言えば、「オミナエシ」は女郎花と書きます。女と

いう文字を男に変えると男郎花???そうです、これがオトコエシという漢字です。



(男郎花)



(女郎花)

茶道の大成者千利休が言うように、自然体のままで季節感を大切に、「花は野にあるように」という心が伝えられています。

しかし、残念な事に言葉の壁があり日本語がわからない、日本文化のわからない外国人には、細かい事は伝えきれない事もわかりました。まず、茶道と深いかかわりのある「脚下照顧」(足元を確認する、または自分自身を常に反省してみるという意味)という考えがその外国人に伝えられておら

ず、スリッパが入り口に散乱していたので、引率教員に「脚下照顧」の意味と必要性を説明し、学生たちにスリッパをきちんと揃えるように言いました。そして、実際にお茶を頂く時の姿勢などもう最悪!でも彼らは、知らないし慣れていないのだから教えてやらないといけないと思います。そこで、静座が理想だが、少なくとも足を放り出さないように促しました。

Tea Ceremony ①



やはり、きちんと言葉で説明しないと外国人が学ぶ日本文化は間違っって伝わるのが良くわかりました。そのような意味でもこれからも海外に正しい合氣道を積極的に普及して行きたいと思います。

【忍者】

今年7月にオーストラリアのメルボルンに合氣道の指導に行った時、友人のColin氏の知人が働いているレストランに食事に行った時、彼を紹介してもらいました。彼は「忍術」を習っているというのです。その場では「忍術」は見せませんでした。後でColin氏に尋ねると、「ライターで手を炙っても熱くない」という実演をしたそうですが、熱くないはずはなく汗を流しながら必死でこらえている様子が氣の毒で、見ていた人たちは拍手をして「凄い!」と言って止めさせてあげたそうです。次に、日本人なら聞いた事くらいはある「雲隠れの術」を見せるというのです。すると、突然

走り出し、自動販売機の後ろに隠れて、「これが忍術だ！」と言わんばかりにずっと自動販売機の後ろから出て来なかったそうです。でも姿はしっかりと見えているので、周囲の人たちは、「どこに行ったのだ！」と言ってやると満足げに出てきたそうです。海外では、「本で読んだ事がある」だけで、先生として教える人がいます。そんないい加減なものを日本文化と呼んで欲しくありません。実際に師匠について修行し、免許皆伝を受けて初めて先生と呼ばれるにふさわしい人になるのです。そのような人に教えられた弟子たちの技はもうどうにもならないくらい原型から離れてしまっています。現在合気道も世界中に広まったのですが、現地にきちんと師匠に長年仕えて修行した指導者が教えている場合は極めて少なく、また第一世代（開祖とその弟子たち）も高齢化して、海外に教えに行く事が難しくなっています。私が今年訪れたオーストラリアでも年に一度自分たちのグループの先生が教えに来てくれるだけで、一年の残りは全て自分たちの理解した合気道を稽古しているだけです。従って、正確な技はできないし、細かい所が良くわかっていないのに驚きました。我々日本人できちんと修行した人間なら当然知っている事でも知らないのです。私が英語で説明してあげると、改めて納得し、感謝されました。その意味からも、私は海外との架け橋として、正しい合気道を普及するために努力したいと思います。

[相撲]

最近、不祥事が続く相撲の世界についてお話をしたいと思います。私は、現在の職場で相撲部の副顧問を2年間務め、全国様々な遠征に参加し、多くの感動的な場面に立ち会う幸運を頂きました。

まず、審判団は当然相撲経験者で、全国

大会で活躍したつわものばかり、筋の通った立派な方々でした。そのような大人が高校生に対して、普段の行動はもちろん、本番前の稽古から本番に至るまで厳しい指導をしていました。特に、首にタオルを巻いてはいけない、ひげを綺麗にそりなさい、だらしない服装をしてはいけない、髪の毛は染めてはいけない、ピアスなど装飾品は一切禁止、など日常的な心構えから、勝ってもガッツポーズをしてはいけないなど、最近スポーツの世界でよく見かける目に余る派手な行為をたしなめ、また立会いでなかなか両手を土俵に付かない生徒がいると厳しく叱責し、指導をしていました。ある高校の監督は佐賀県で行なわれたインターハイの会場で、試合前のぶつかり稽古と呼ばれる稽古中、相手の頭と自分の頭がぶつかるのを怖がる生徒が頭を真っ直ぐにしないでぶつかるとその生徒を呼びつけ、皆の見守る前でげんこつで数発顔面を力いっぱい殴るのです。「これより痛くない！真っ直ぐ突っ込め！」と言うのです。この指導法は今の時代には合わないと思いますが、昔はもっと厳しかったそうです。もちろん頭と頭が激突するわけですから、血を流して包帯を巻いている生徒もよく見かけました。師匠の言う事は弟子には絶対服従の世界です。

そんな厳しい指導に対する評価は別として、そのような伝統の中で育った日本人に対して、外国人力士にはその伝統の意味が理解できないと思います。「勝てばいい」という発想になるのでしょうか。武道である相撲は「勝てばいい」の世界ではないのです。強さの中に優しさがあり、相手を思いやる心がなければなりません。相手が土俵際でこらえて倒れる瞬間に怪我をさせてはいけないので相手の身体の下に手を置いてやる「かばい手」という考えも思いやりの現れでしょう。更に、優れた人格を確立してい

く事が武道の目標なのです。

また、去る8月27日・28日両日にモンゴル巡業が行われましたが、現地では英雄である横綱朝青龍ではなく、大関魁皇が大人気だったそうです。これは上記で述べたことに通じるのですが、強さを誇る朝青龍にたいして、常に控えめな態度の魁皇が魅力的なのだそうです。魁皇は勝っても負けても表情を変えず、常に伝統的な相撲道に基づく控えめな態度が美しいとモンゴルの人たちの目には映ったそうです。

合気道について言えば、世の中にはいろいろな合気道があります。しかし、少なくとも私たちがやっている合気道は強いエネルギーを発して技を行います。常に相手のことを気使う優しさ、思いやりをもって行い、決して相手に怪我をさせず、痛い技もありますが相手に敬意を表しつつ行います。相手を投げたり痛めつけるだけの技は武道ではなく、「勝てばいい」という考えの武術です。このような伝統文化の考え方の継承もきちんと伝えていかなければならないと思います。

[柔道]

北京五輪の柔道の試合を見てもどかしさを感じたのは私だけではないでしょう。ヨーロッパの選手は、タックルのように足を攻め、まるでレスリングのような競技になってしまいました。日本人の多くは一本勝ちこそ柔道の醍醐味であると思っています。「柔道」から“JUDO”になった時点でルールも変わり、日本の柔道の心が徐々に失われていきました。多くの日本の柔道家が敗退する中、金メダルを取った石井 慧選手は「勝つために」柔道だけでなく、レスリングやブラジリアン柔術の道場にも1人で出かけて腕を磨き、積極的に他競技の技術も学んでいるそうです。それ自体は悪い事ではありませんが、勝つ事が目

的になり、己を磨くという『武道』の心を忘れてしまっています。インタビューの中で、「自分が金メダルを取る事ができたのは、周りの人が支えてくれたおかげではなくて、自分が天才だからです」というようなバカな発言を見てもそれは明らかです。自分を育ててくれた師や支えてくれた人々に対する感謝の念を持ち、慢心を抑え常に謙虚な心で己を磨く態度が武道には欠かせません。そのような意味で、昔から剣の道を志す人々は『禅』や『論語』のような思想を学び、心を磨いてきたのです。幸い、柔道男子日本代表監督に篠原信一氏が就任したことは、嬉しく思います。「一本を取る柔道」を標榜する 新監督に期待したいと思います。8年前のシドニー五輪では「世紀の誤審」に泣き、銀メダルに終わりました。「敗因は自身の中にあったと今も思う。(誤審の直後に)気持ちを切り替えていれば、結果は違った。技術、体力も大切だけど、心が一步足りなかった」と述べておられます。以来、色紙には「気」の一字を大書するそうです。(「気」ではなく「氣」のほうがもっとよかったですと思いますが・・・)

女子柔道では、63kg級の谷本歩実選手の本勝ちは多くの方が感動したと思います。あれこそ日本の柔道だと思います。予選から決勝まで、谷本歩実選手はすべて「一本勝ち」を果たしました。「優勝できたのは恩師のおかげ」と彼女は言います。この恩師は、かつて彼女に柔道の真髄、本質、魅力は“一本”にあると語り、先手を取ることがカギだと教えた。「技術だけに頼らず、自分に合った柔道の道を見つけ出すことを恩師から教えられた」と彼女は語ります。

ここ数年、柔道の国際大会におけるルールが変わり、日本の伝統的な技である「一本」は、新しいルールのもとでは、もはや

有利な技ではなくなりました。しかし、谷本選手はアテネ五輪でも北京五輪でも「一本」にこだわりました。「この道は自分だけでなく、次の世代にも伝えていきたい」と彼女は言っています。

私の叔父も柔道家で、谷本選手の高校時代の柔道部の監督と同じ大学の柔道部で競い合った仲です。そのご縁で谷本選手の色紙を戴きましたので、載せておきます。これを見て、気持ちを高めてください。



[野球：メジャーリーグ]

イチロー、松井、松阪・・・挙げれば切りがありません。今日ますます多くの日本人選手がメジャーリーグに採用されています。事実、メジャーリーグのコーチやチームのオーナーはアメリカ人選手よりも日本人選手を好んでいるなどと言っている人もいます。アメリカ人選手は文句が多かったり、報酬に対しても非常に欲深いと、評判が良くないそうです。日本人選手は文句は言わないし、より高い給料の交渉に関してもあつかましいとはほど遠いところにいます。彼らは時間を守り、熱心に、懸命

に取り組む事で有名です。アメリカ人選手にとって、彼らを相手に善戦する日本人選手から学ぶ事が大いにあるのではないのでしょうか。

[西陣織]

「日本人は“心の窓”西陣織を失っていいのか」
COURRIER Japon 28号(2007/2/1日発行)
の上記のタイトルが目にとまりました。

1200年の歴史を持つ西陣織が消滅しようとしていることをご存知ですか？

「西陣織は、機械化が進み、手織り職人による伝統的な織り方が存続の危機に瀕している。京都を代表する産業であるにもかかわらず売り上げは低迷し、後継者を育てる制度も整っていないからだ。」

職人が高齢化して、後継者がいないということです。現在の最後の職人と言われる人達の職人の平均年齢は90歳を超えているそうです。後継者を育てるにはもう残された時間は余りにも少なすぎます。



【山口安次郎、103歳の京都の西陣織の現役職人】

なぜ、そのように長い歴史を持つ日本の伝統文化の継承者がいないのかが疑問です。その理由は、「売れないから」です。その結果生計を立てるに十分な収入を得られるか不安で、修行に入ろうという若者がいないからです。多くの職人の月収は5万～8万円くらいで、とても厳しいそうです。どの業種でも言える事ですが、外国の安い製品

に押されて国産が売れないのです。特に日本の伝統産業はとても手間隙かけて作るものですから、職人の高度な技術を要し、どうしてもコストがかかってしまいます。市内の呉服店の中には呉服と洋服の両方を扱ったり、それ以外の商品を扱う所もあります。私のかつての教え子の呉服店は10年ほど前に店をたたみました。残念な事です。やはり伝統文化は本気で伝えていかないと消滅してしまいます。

以上、様々な日本の伝統文化の現状を見てまいりましたが、いずれもこれから次の世代に伝える事に真剣に取り組まなければならない事がお解かりいただけたと思います。私が一番大切に思っている事は、「心」を磨く事です。

1. 何が起きても動じない平常^心を失わず、
2. 常にプラスの^心を堅持し、
3. 慢^心を捨てて脚下照顧いつも己の行いを見つめ謙虚に生き、
4. 感謝といたわりの^心を持ち、
5. 人と争わずゆったりとした^心の状態
日常を送って欲しいと思います。

これらの事は、本来農耕民族であった日本人は昔から心得ていた事です。本来狩猟民族であった西洋人には理解しがたい事らしいのです。友人のColin氏の奥さんJackieは、いつも競い合う西洋人にはこのようなことが難しいと言っていました。だから、合気道の教えが解らないなりに魅力的なのだそうです。

それでは、同じ人間なのになぜそのような違いがあるのでしょうか。それは西洋の近代化が大きな鍵となります。西洋における近代化には2つの支柱があります。

その第一は【自我】を原点としてそこからすべてを考えてゆこうとする立場です。そこから限らない自我の主張とその展開が生まれてきたのです。また、この自我の立

場の極端な主張の前にそれまで豊かに展開されていた自然も客体（主体に対する言葉で、自我が主体となり自然が主体の意思や行為が及ぶ目的物）になり、今や人間のエゴイズムの単なる収奪の対象でしかなくなっていきました。そこに限りなき環境の破壊が生じていく事にもなったのです。

第二は排他的な【理性】です。もちろん理性は人間の本性に属するものでその重要性は決して無視されるべきものではありません。しかし、そのことについて理性以外のもの、例えば人間の豊かな感性や宗教的な霊性までもが排除され、あるいは無意味化されていく時、そこには致命的な偏向が生じる事になります。そしてそこにはかえって豊かな人間性、また文化の健全性などの喪失に連なっていく事も否定できないでしょう。

これらの西洋の近代化の影響を受け、更に第二次世界大戦後、大半がヨーロッパからの移民である米国の影響をもろに受けた日本は、日本古来の価値観を捨て、アメリカナイズされていったのです。20世紀後半から21世紀初頭、現在に至るまで「グローバルスタンダード」という言葉が台頭していますが、実際は「アメリカンスタンダード」に他なりません。米国の悪口を言うわけではありませんが、「アメリカンドリーム」に裏打ちされた「アメリカンスタンダード」は先住民族を除いて、西洋の近代化思想を持ったヨーロッパ人とアフリカから連れてこられたアフリカの黒人奴隷の子孫が追い求めてきたもので、新天地アメリカでどのような種類のお金であっても大金を手にして成功する事が「アメリカンスタンダード」の価値観の根底にあるのです。そのように考えると、近頃起きている食品の危険・様々な偽装・汚職・金融危機などの原因が読み取れるのではないのでしょうか。特に米国に端を発する金融危機などは、お

金でお金を儲けるマネーゲームの結末でしょう。昔から、「汗水たらして働く」ことこそ、美德だと私は考えるのですが…

合気道のような日本の伝統文化の根底には、古き良き日本の価値観なり思想なりが流れています。世間で日常起きる様々な出来事を見て、多くの人が、「世の中、一体どうなっているのだろう」と思っている事と思います。今こそ日本の伝統文化を次の世代に伝え、失われた良き日本の価値観を取り戻し、少しでも世の中をよくしていきたいと思えます。皆さん、一緒に頑張りましょう！

【松阪地区医師会主催護身術セミナー】

去る10月10日(金)の夕刻、松阪地区医師会主催の「護身術セミナー」が松阪市看護専門学校(松阪市)の体育館で開催され、私が講師として招かれました。去年の第一回目は大島先生が講師で、今回が2回目です。参加希望者多数のため、定員を40名にして当会の有志10名ほどにお手伝いを頂き、大変満足をしていただきました。年に一回のセミナーで技が身につくとは思えませんが、少なくとも平常心を失わずに日常生活を送る事の大切さを訴えました。技を使って暴漢から身を守ることだけが護身術ではありません。むしろそのような場合のほうが少ないのです。道を歩いている時に車が突っ込んできたり、石や段差につまづいて、転倒したり、日常で何が起こるか予測は出来ません。どのようなことに対しても平常心で臨めば冷静に対処でき、危険を回避することが真の「護身術」なのです。

尚、この護身術セミナーは鮎田さんのご厚意によって実現したもので、感謝申し上げます。また、お手伝いいただきました会員の方々にはお仕事を早めに片付けて会場に駆けつけていただき、準備からセミナーの補助など大変お世話になったことに心よ

り感謝申し上げます。



【基本の小手返しの説明】



【胸ぐらをつかまれた時の説明】



【胸ぐらをつかまれた時の技の説明】

【ワークセンターフェスティバル】

10月19日に松阪市上川町にあるワークセンターで、恒例のワークセンターフェスティバルが開催されました。この日は、火曜日のワークセンター事業の「初級合気道講座」の発表でした。講座受講生が技の発表と露店を出店するお祭りです。

演武は青空の下、大勢の見守る中、全員が日頃の成果を発表しました。

露店は、クレープ屋でした。前日から準備をして、当日は完売でした。



【開 店 準 備】



【慣れた手つき！】

閉店後、市内のフレンチレストランで打ち上げ！皆これが楽しみで頑張りました。



「美味！」の一言でした。

【第9回順心会合気道発表会】

11月2日に松阪市武道館で第9回順心会合気道発表会が開催されました。今回は子供の参加が例年より少なかったことがとても残念でなりません。来年は10周年ですので、全員のご参加をお願いします。

この発表会は、中学生以上の会員のボランティア精神によって成り立っています。まさしく「滅私奉公」の心です。前述した「自我」の強い世の中ですが、この「滅私奉公」の精神こそが修行の心得第一条といえると思います。そこから、様々な事を吸収し、成長していくのだと思います。

準備体操後、師範による技の解説があり、子供・一般と順次演武が行なわれました。



【師範による技の解説】



【子供の演武はいつもかわいい!】

今回は、7月に訪れたオーストラリアのブリスベンから指導者のダニエル氏も参加してくれました。



【ダニエル氏の演武】



【4人の相手に襲われた時の多人数掛け】



【6人跳び越し受身】





これを見てから、子供たちが刺激を受け、小学生の子供たちも、「跳び受身」がしたい、と言っています。

発表会后、通称第二道場で打ち上げが行なわれ、スタッフの一層の団結を見ました。



【第二道場にて：若者たち】



【第二道場にて：大人たち】



【集合写真】

2010年には、松阪市武道館に日本・アメリカ・ヨーロッパなど世界中から集まって、順心会主催で3日間の合宿を行ないます。そのためにも、一層技と心を磨いてください。